

行きずりの愛 パート1

木村 敏美

膝を悪くして散歩するようになったのはいつ頃だったろうか。

家の中にランニングマシンはあるが、絶対外に出て歩きたいので少々雨でも決行している。色々な住宅の庭の花や植木や並木は日々変化している。それを見るのが楽しい。

また、道端に咲いている雑草の花があまりに可愛いので、少し戴いて家の花壇に植えた。時々ごみ拾いもしているし、他の家の庭でもよく見かける。ただでは帰らないのが私だけれど、何と言ってもその日一日の幸せ感を得られるのが人との出会いだ。出会いと言っても、すれ違うだけの短い時間の出来事で、散歩の時間もコースも決まっていないので、二度と会う事もない行きずりの出来事だ。行きずりの恋とは、経験があるか否かは別にして遠い昔の話になったが、この散歩での出会いを「行きずりの愛」と呼びたい。毎日出会いがある訳ではないが、心の何処かに灯がともった様な温かいエピソードができた。その一つを紹介します。

一日五千歩目標達成に近くなり、我が家のすぐ前の公園に来た時、幼い女の子の声が聞こえた。「何処行くの」。行かないで」と。するとすぐ近くから男の人の声が出て「行かないで」と言っている。そして私の前に女の子が走ってきて、指をさして「行かないで」。何処行くの」と叫んでいる。その方向を見ると我が家の隣の二階の屋根の上を小鳥が飛んで行っているのが見えた。その姿はすぐ見えなくなったが、気がつくと私も「行かないで」と言っていた。鳩より小さく雀より大きくて、人をあまり恐れないので公園でよく見かける。父親と来ていたらしい女の子は小鳥と暫く遊んでいたのかも知れない。まるで童話の世界に入ったようで、一日温かい気持ちが続いた。

その後のエピソードはまた紹介します。 「行きずりの愛」よ、いつまでも。